

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
255
載

北斎とゴヤ

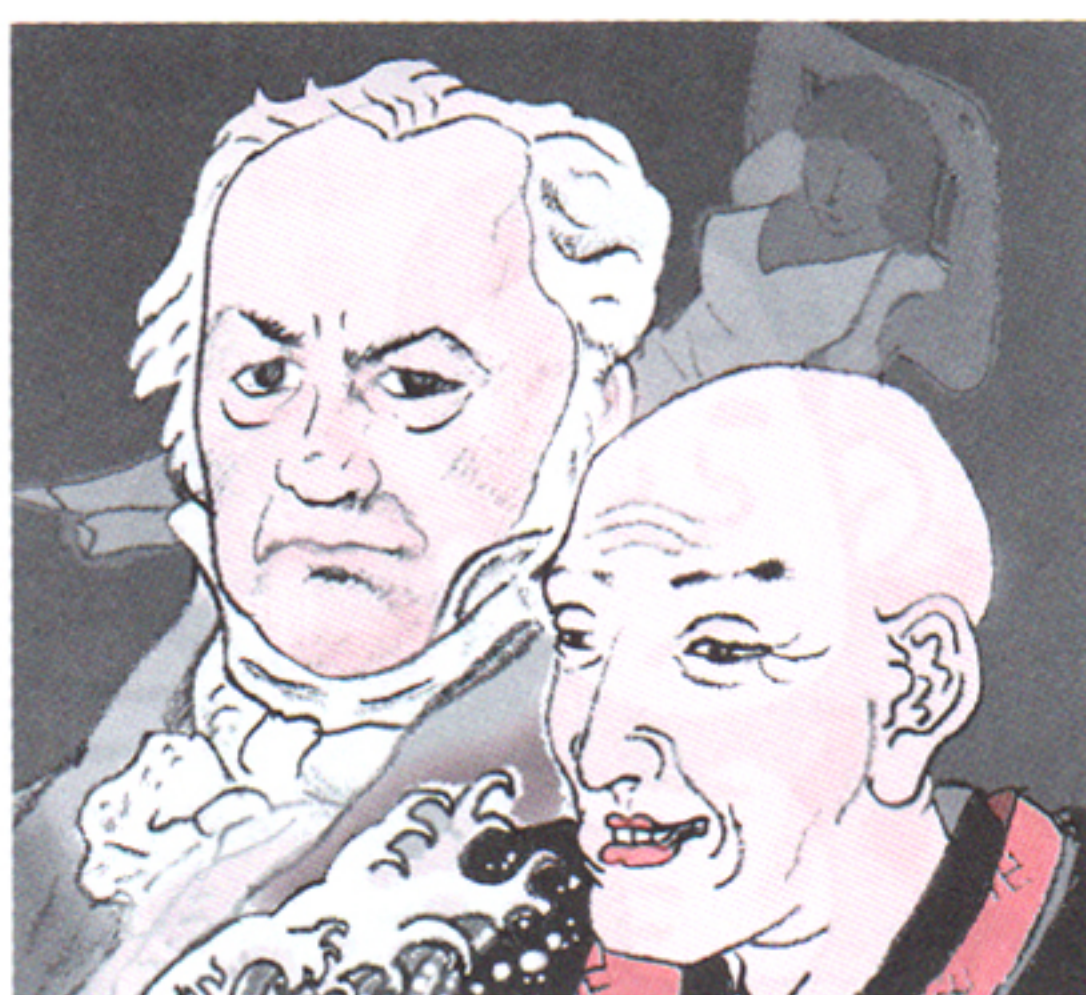
芸術音痴の私でも、葛飾北斎は知っている。

1999年、アメリカのライフ誌が「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」という特集を組んでいる。北斎はその100人の中に選ばれた唯一の日本人である。

北斎の作品で多くの人に知られているのは「富嶽三十六景」だろうか。とりわけその中で有名なのは「神奈川沖浪裏」だ。作品名を知らなくても、見れば誰もが知っている。大きくせり上がる浪の向こうに雪をいただいた富士山が見える。浪の間に二艘の船が漂っている。今にも浪に飲み

ふたりが同じ版木の裏表を使っていたこと、スポンサーが同じ人物であること等々その証拠には事欠かない。果たして、北斎は写楽なのか。こういった謎めいた伝説を醸し出すのもまた、天才ゆえだろう。

ところで、北斎が「富



て述べている。さらに「(略)90歳になればその奥意を極め、100歳でまさに神妙の域を超えられるのではないだろうか」と続く。北斎にとつて「富嶽三十六景」は完成ではなく、始まりに過ぎなかったのだ。

北斎と聞いて連想するのは、スペインの画家ゴヤである。こちらも北斎に負けず劣らずキヤラが濃い。

ゴヤは、スペインの貧しい村の職人の子として産声をあげた。苦勞して宮廷画家の職を手に入れたと思ったら、40歳代で突然原因不明の高熱に襲われ聴力を失ってしまった。しかし、

ゴヤは絵を描く手を緩めない。「カルロス4世家族像」「裸のマヤ」「マドリッド1808年5月3日」などの代表作は、すべてその後に描いたものだ。さらに、73歳から郊外の別荘「聾の家」に引きこもり、後に「黒い絵」と呼ばれる14点を残

した。晩年に残された自画像には「俺はまだ学ぶぞ」という、強烈なゴヤの言葉が残されている。

北斎が生まれたのは1760年、江戸文化が花開いた時代にあたる。浮世絵は、もとは憂き世絵であり仏教的な意味を持つ絵画的表現のひとつだったが、江戸が平和で心躍るような時代へ変貌するのに対応するかのよう

に花開いた。かたや、ゴヤの生誕は1746年。スペインは激動期のまただ中にあり、フランス軍対スペイン民兵の残酷極まる対立も目にし、晩年はフランスに亡命し、

ポルドーで最期を迎えた。両者ともその時代の代表的な画家でありながら、時代やおのれに負けない人生を歩んだ。芸術には疎くても、彼らに共通する「生きる」ことへの意欲こそが、私たちを魅了する。

イラスト・伊藤香澄